

シンポジウム

精神科医としての専門性について考える——専門性を獲得する途にある若手精神科医の現場からの声——

コーディネーター 丹羽 真一, 加藤 隆弘

本シンポジウムはJYPO(若手精神科医の会)が、これからのわが国の精神科医療、精神医学の発展をになう若手精神科医の育成を目標として、毎年の総会の中で継続的に行っているシンポジウムである。今年はJYPOの加藤隆弘先生と丹羽とが司会を務めて開催した。

シンポジウムの柱は、JYPOが若手精神科医を対象として行っている二つのアンケート調査の結果の報告であるが、同時にアンケートの主題でもあり、若手精神科医の育成の上で検討が必要であると考えられてきている実際的な問題も報告され、それらをめぐって活発な議論が行われた。

JYPOが行っているアンケート調査の結果のうち、北海道と神奈川県で日本精神神経学会の地方会に所属するJYPO会員を対象として行われた結果について、加藤隆弘先生(九州大学)がシンポジウムの最後に発表された。この中では、若手精神科医が精神科を志した動機と、実際にどのようなことを学ぶことができているか、研修の途中で感じる問題をどのように解決できているか、あるいは解決策を求めているか、などについて発表された。この調査結果は、薬物療法と精神療法の両者を学びたいと志して精神科研修を開始した若

手の中に、精神療法の研修が不十分であると感じている人が多いことを示すものであった。この点については学会として精神療法研修の場を増やすことで解決策を講じている事柄ではあるが、学会として引き続き解決のために努力する必要があることが示された。

シンポジウムでは、藤内栄太先生(福岡大学)から「精神療法(特に力動的精神医学)を学ぶ若手精神科医の立場から」という発表が行われ、調査結果に現れている問題点について、どのように努力をしてこの問題に取り組んでこられたかについての経験を話された。

シンポジウムでは、また、「児童精神科医を目指す、一若手医師の立場から」の発表を吉岡知子先生(高知大学)が、「地域社会への働きかけを行っている若手精神科医の立場から」の発表を鈴木友理子先生(国立精神・神経センター精神保健研究所)が、「大学病院での精神科研修について——新制度で後期研修を始めた精神科医第一号の立場から」の発表を宮島加耶先生(慶應義塾大学)が、それぞれ行われた。児童精神医学研修、女性医師の研修確保、社会精神医学の方法論の研修、大学病院での後期研修、といった各々のテー

マは、これからの精神科医療，精神医学の発展を考える際にいずれも重要な問題点であり，各先生が発表された内容はいずれも各先生の実験の経験に基づくものであり，貴重な内容であった。

この若手精神科医の育成をめぐるシンポジウムが今後も継続して行われ，問題点が整理され，解決のための方向性が提起されてゆくことが期待される。
